

浄土

2
1995

わが心の涅槃園

大室了皓

旅

小豆島紀行

夏 攸吾

新連載

教育の現場から

内堀照夫

好評連載

稲葉小太郎 関 容子 御所野洋幸
佐藤雅彦

釈尊涅槃物語 —クシナガラ— 北山宏明



法然上人鑽仰会発行



総合情報通信企業をめざす

日本テレコム

は
じ
め
に
押
し
て
ね、
0
0
8
8。



ゼロゼロ押したら ハッピー ハッピー

0088

日本を楽しくする電話

お申し込み・お問い合わせはお客センターへどうぞ。

☎0088-82(無料) / ☎0120-0088-82(無料)

■受付時間 9:00~23:00(年中無休)

0088なら●月々の基本料金は一切かかりません。ご使用になった通話料金
だけのお支払いです。●かけ方は簡単。現在お使いの電話機で、市外局番
の前に“0088”を押すだけ。●60kmを超える市外電話は0088がおトク。

小豆島紀行



写真Ⅱ 夏 攸吾

寒の陽光を浴びる小豆島の手延そうめん

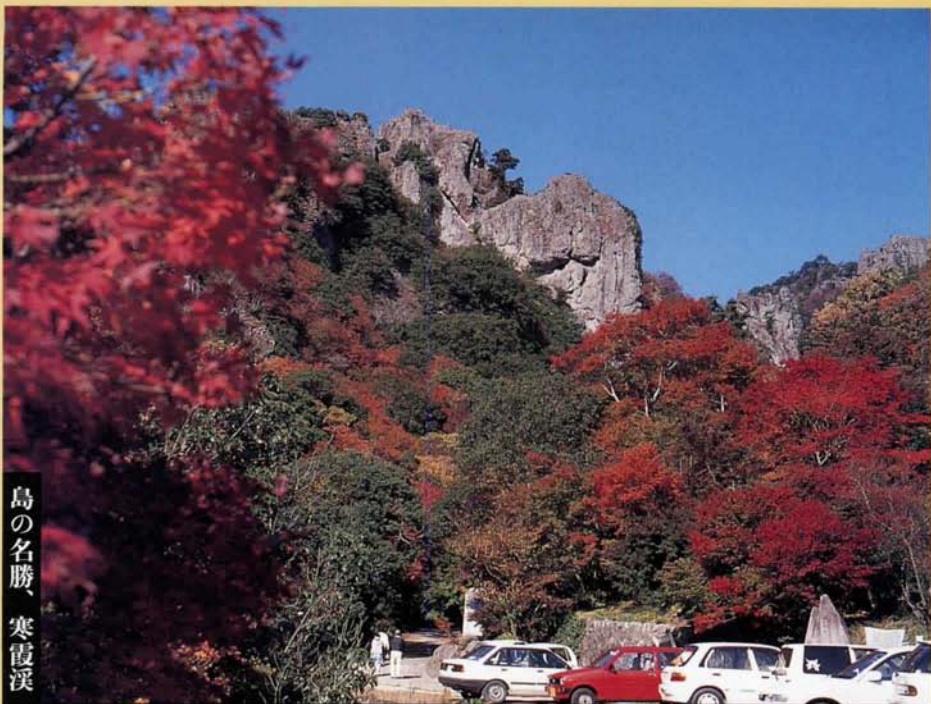


定置網を揚げる島の漁師夫婦



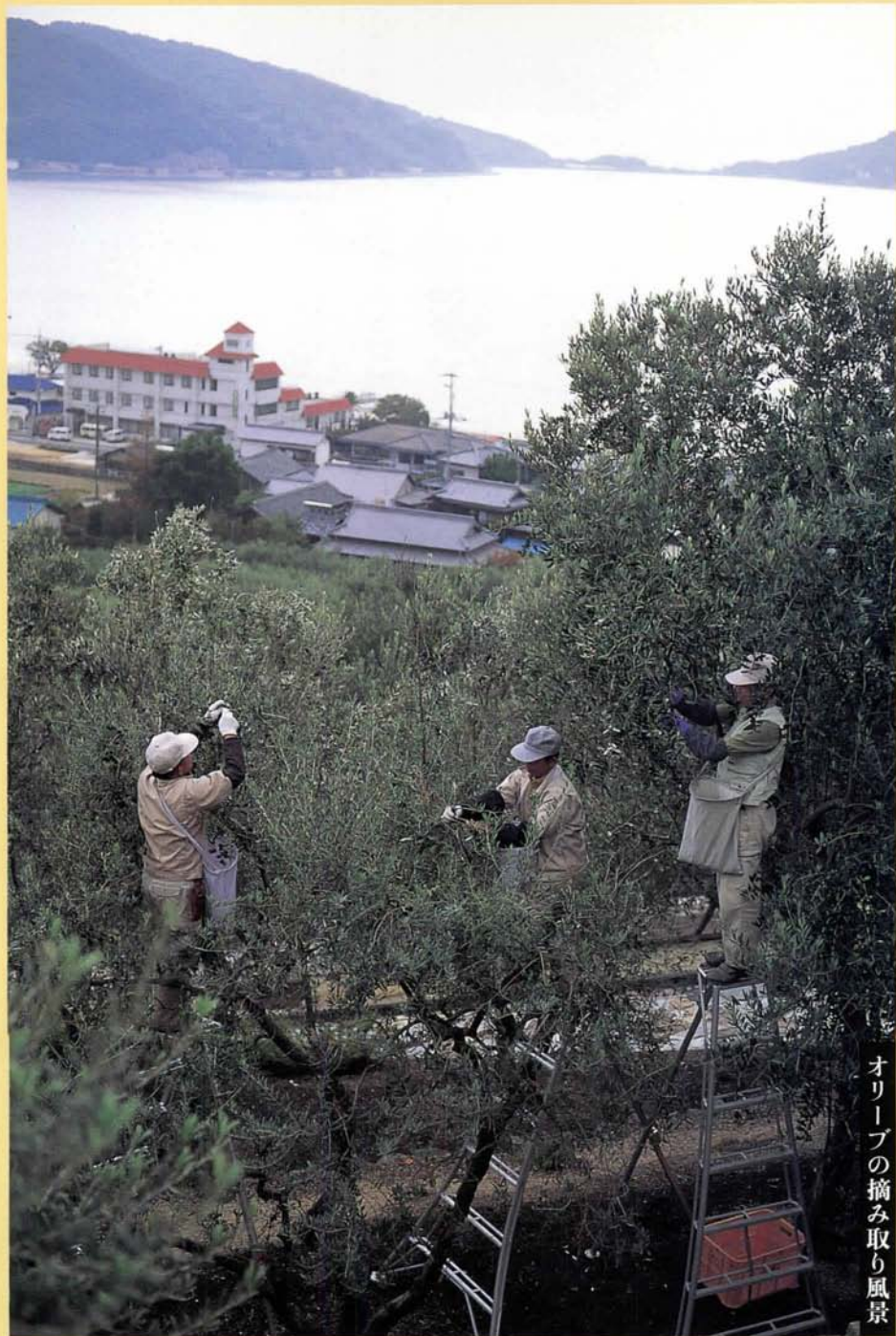
二十四の瞳映西村

島の名勝、寒霞溪



古い醸造蔵（丸金醬油）





オリーブの摘み取り風景

浄土



1995/2 月号 目次

[カラー口絵]小豆島紀行	写真=夏 攸吾	3
わが心の涅槃図	大室了皓	8
仏跡巡拝記 ―クシナガラ―	北山宏明	16
小豆島紀行	夏 攸吾	22
楽屋ゆかた ― ⑤		
松本幸右衛門(一)	関 容子	30
現代の快僧 ― 最終回		
大事故現場の極限のなかで	稲葉小太郎	36
教育の現場から	内堀照夫	48
共に生きる ― ブナ原生林から ―		
.....	御所野洋幸	56
伝えるということ ― 私のアメリカ留学記(二) ―		
.....	佐藤雅彦	60
JODOコラム 涅槃像と横たわる仏		68
編集後記		70
表紙題字=浄土門主 中村康隆 貌下		
表紙撮影=御所野洋幸		
目次・編集後記イラストレーション=柴 文人		



わが心の涅槃図

大室了皓

晩年の釈尊には、お心を傷めたであろう悲しいことが起きている。

故里の釈迦国がその宗主国であったコーサラ国に滅ぼされ、王族以下ほとんどの人達が殺戮の悲運にあったこと。

それから、釈尊の高弟で十大弟子のうちに数えられ、右腕ともなりまた左腕ともなって、

おそばに仕えてきた舍利弗と目連があいついでこの世を去ったこと。

既にお悟りを開かれた方だから、とは思うものの、二人の訃報を耳にされるや、傍らの阿難に向かって

「佛陀には、自分の寿命を延ばす能力がそなわっているのだが」

と洩らされたと聞けば、釈尊なりの悲しみが
おありだったに違いない。

お年ははや八十歳になつておられた。

間もなく阿難らを連れ、長年過ごされた、
マガダ国の首都である王舎城の靈鷲山を降
り、今のベナレスを経て、道を北東にとり故
里であるかつての釈迦国への旅に赴かれた。

老齡の釈尊の足は次第に弱まつて、阿難に
支えられながら進まれた。バーバの町に漸く
お着きになり、チュンダの茸料理の供養を受
けられてから、クシナーラの郊外に入られた
ところで、激しい下痢をともなつた腹痛に苦
しまれ、仰つた。
「疲れた。横になりたい」と。

急ぎ阿難が一對の沙羅樹の間に用意した床
に、右脇を下にして、足を重ねて横になられ、
やがて静かに涅槃にお入りになった。

時にクシナーラの人々が、天からは天神達
が、やがて摩訶迦葉ら五百人の弟子達が馳せ
参じた。

鳥、獸、小動物、昆虫など多くの生き物ま
でが集まり嘆き悲しんだと伝えている。

釈尊おん年八十歳。時は二月の満月の日の
十五日であつた。

今はわが国では、太陽曆になつたが、この
日をもつて涅槃会が行われている。

この涅槃会には涅槃図を掛けて法要が営ま
れていることは周知のことだが、涅槃図には



様々なものがある。

大本山増上寺の涅槃図は稀にみる大幅であって、参詣者の注目を集めている。

左右が三・五米、天地が五・三米もある。

大殿内陣北側壁面に掛けられるが、他にはこれだけの大幅を掛ける場所がない。

座して拝むと誰しも圧倒されてしまう。

正營廓山（増上寺第十三世）の裏書きがあり、元和十年（一六二四）に徳川家康の側室であった於奈津（おなつ）の方が施主となつて、江戸初期に活躍した絵師の狩野秀信に描かせたものであるが、彼の絵はほとんど明暦の大火などで焼失していることもあって、貴重な文化財となっている。

涅槃図で最も古いのは、中央アジアのキジル出土のもので、釈尊は沙羅双樹のもとに頹杖をついて横たわり、既に火がつけられ迦葉ただ一人が釈尊の足に手を触れているのみで、他には誰一人見えないし、動物なども全く見られない。

日本で最古のものは、法隆寺五重塔内に配置された三十二体の塑像のある涅槃群像であるが、動物はいない。

時代が下り鎌倉期になるに従つて、弟子などの群像が増え、動物なども数多く描かれるようになってきた。

増上寺のものは、鎌倉時代作と伝えられる広島浄土寺の涅槃図に著しく似通っていると



増上寺にある涅槃図。

ころがある。

両図とも、頭北面西、右脇を下にして横たわる釈尊の周圍、特に背後と左右に多くの弟子や諸天が嘆き悲しんで集まり、全面には象や獅子を初めとして、孔雀・鳩・鳥・梟などの鳥類、蜻蛉・蟬などの昆虫たちなどの数多くの動物が描かれているが、それらの姿かたちや、涅槃図には極めて珍しいとされている「猫」がいることも、共通していて興味深いものがある。

浄土寺本には画面の左右、下の三方を十六区画に分ち、そこに釈尊伝が、また摩耶夫人一行が忉利天から下りてくる姿が描かれているが、増上寺本にはそれがない。逆にこちら

らには満月が空高く描かれていること。また片方は肘を立てた手枕、一方は飾り枕の違いで、あとは殆ど同じ様に見える。

大般涅槃經には五十二種の生物が集まるとされているが、猫は含まれていない。

その猫がいるのも興味深い。

なぜ經典には猫が含まれていないのか。また含まれていないのに、なぜ描かれているのか。

わずか二度のインド旅行だが、犬は多く見かけたものの、猫の姿は全く見る事ができなかった。

現地の人に尋ねると、犬は家の外で過ごす、猫は内も外もないので不潔だから飼わな

い、昔からだという返事が返ってきた。涅槃図に無いのは、或はそのようなインドの風習からかも知れない。

増上寺本にあるのは、猫は身近な愛玩動物という日本の風習によつたものではないかと思つたりした。

増上寺に涅槃図が掛かると、明徳幼稚園児達がお参りに来る。この子達を前にして話したことが幾度かあつた。

「お釈迦様の回りに木が何本あるかな」

「七本」

「違ふね。よく見てごらん。ほらこの木の陰にもう一本あるじゃないか。八本だね。東西南北に二本づつあるんだよ」

「あの木の葉はどうして白いんだろう。教えようか。亡くなったので木まで悲しくなつて葉が白くなつたんだ」

「上の方にある丸いのはなんだろう」

「お月さま」

「そうだ。満月の日だからまん丸なんだ。昼間だけど、お空で悲しそうだね」

「たくさん動物などがいるね。これは何んだろう」

「象さんだ。だけど鼻が小さいし、足に爪があるよ。動物園の象さんとどうして違ふの」

子供の観察は鋭い。

「昔はね、日本にはいなかったんだ。だからこの絵を描いた人は、象さんを見たことが無



かったんだよ。これはライオンだが、君たちの知っているのとは少し違うね。やっぱり日本にいなかったからね。さて、大勢の人達や動物たちはどうしてる」

「笑っている」

それを聞いて、どうしたことかと戸惑ったが、幼い子供たちの視線は下の方の動物に向けられていた。確かに象もライオンも笑っている様に見える。

「上の方に沢山の人がいるね。笑っているのかな。よく見てごらん」

「泣いてる」

「そうだね。この人は悲しくて立っていられなくなつたんだ。横になつてるだろう」

子供たちはわかつてくれたな、と安心したら「どうして牛とか蛇とかありんこまで集まつてきたの」

素早く答えなくてはならない。

「ここに鳥がいるだろう。この鳥が飛び回つてね、大変だあ、お釈迦様が亡くなつたぞ。そう言つてみんなに知らせたんだよ」

納得してくれたようだ。

「お釈迦様のお陰で、君たちは幼稚園で楽しくできるんだ。ノンノンノサマと歌っているだろう。さあみんなでお手を合わせて拝みましょう。南無阿弥陀仏……」

私は人間ばかりでなく、獣や昆虫たちまでが馳せ参じて嘆き悲しんでいる涅槃図を拝し

ては何時も考える。

釈尊の偉大さを、また弟子を初め人々の深い尊崇の心をどのように表現したらよいか、仏教を奉じる人達の考え抜いた結果、長い年月を経て、いま私たちが拝するようにできてきた。その先人の釈尊に対する厚い心情にまです動かされる。

とともに、私の時には何人の人が涙を流してくれただろうかと、考え込む。

住職という立場で多くの「死」を知っているが、幼児や若い人の時はともかく、平均年齢を越した人の場合などは、殆どが義理で焼香にやってくることを、傍らにいて何度も経験する。

時には近親者でさえ涙しないことがある。

そうした時、故人はどんな生き方をして来たのだろうかと考えてしまう。

やがて来る私の時には、家族が泣くのは当然であって、そうでなければ最低の人間になってしまう。

そして、赤の他人が五人でよいから、心底から涙を流してくれたら、我が人生に悔いはない。またそうなれるように、今までの反省の上に立って、これからの人生を送るにはどうすべきか。

涅槃図の釈尊は、何時も私に説いておられる、と思えてならない。

(光取寺住職)



釈尊涅槃物語

クシナガラに立つ

北山宏明



撮影・松本栄一

涅槃の地クシナガラ（現在はカシア村）に向かう。読経の騒音はまだ町中に響きわたっている。そのエネルギーにも驚くが、騒音に対して何の抵抗をしめさない町の人々にも驚くほかはない。

クシナガラは、ゴラクプールから五五^キの処にあり、一時間余りで着く。

二九才で出家された釈尊は、苦行林において六年の修行後、ブダガヤで成道されたのが三五才、そして八十才でこの地に入滅された。

八十才になられた釈尊は、ラジギールの^{りようじゅ}靈鷲山を後にした。それは法華経、大般若経、観無量寿経のすべてを説き終わったからである。阿^ア難陀^{ナダ}の他に数名の弟子が師に従った。部落から

部落へ伝道を続けつつ、パトナでガンジス河を渡りヴェサリー村附近で雨期となり安居（休むこと）に入られた。しかし老齡の身にとって暑さの中の遊行は余程こたえたのであらう。不幸にもここで発病された。大般涅槃經に

「恐ろしい病が生じ、死ぬ程の激痛があつた」

と記している。多分今の赤痢だろうと推測されている。既に死期を感じられたか

「アーナンダよ、恐らく私がヴェサリーを見る最後となるだろう」

と云われ、更に苦しい布教の旅を続け、ヴァー村に至った。そこで貧しい鍛冶屋チュンダの施食をうけられた。ところが前に増して激しい腹痛と下痢が襲つて来た。それでも釈尊は、旅を続けクシナガラ村に着いた時は一歩も前に進めなくなり、村の入口にある沙羅双樹（さろうじゆ）の

林の中に床を敷かせ、頭を北に右脇を下にして臥した。ともすると意識が消えがちな釈尊の耳元に口を寄せて、大声で呼ぶ従者阿難陀達に、
「すべてのものは滅してゆくものである。放逸に流れることなく精進せよ」

とさとされ、また

「弟子達よ、私が死んでも指導者が亡くなつたと思つてはならない。私の説いた教えと戒めが、お前達の指導者である」

と説かれている。

釈尊の入滅をきき、弟子や信者達が全国からクシナガラへ集まつて来た。村人達が遺体を白布に包んで火葬にふした。

舍利（遺骨）は、マガダ国、カピラ国、クシナ国、ババ国、シャラバ国、ラマカ国、ビルダイ国、ビシャリ国等、北部インドの八カ国に分

けられた。

私達の車が最初到着した場所が、茶毘所と呼ばれる火葬の地で、ラマバルと称する高さ三十メートルほどの煉瓦積み塚がある。その上には誰でも登ることができ、日本から持って来た分骨を、塚に穴を掘って埋めている者がいた。よく見るとそれらしい跡が沢山あった。だが本当の火葬の場所は、此処かどうかは定かではない。

塚の附近には、夾竹桃の赤い花が咲き乱れていた。この塚より千メートル程離れた場所に入滅された聖跡がある。道路を入るとすぐ右手に沙羅樹の林があり、村の子供達が沙羅の葉を持って来て、チップを貰おうと集まって来る。

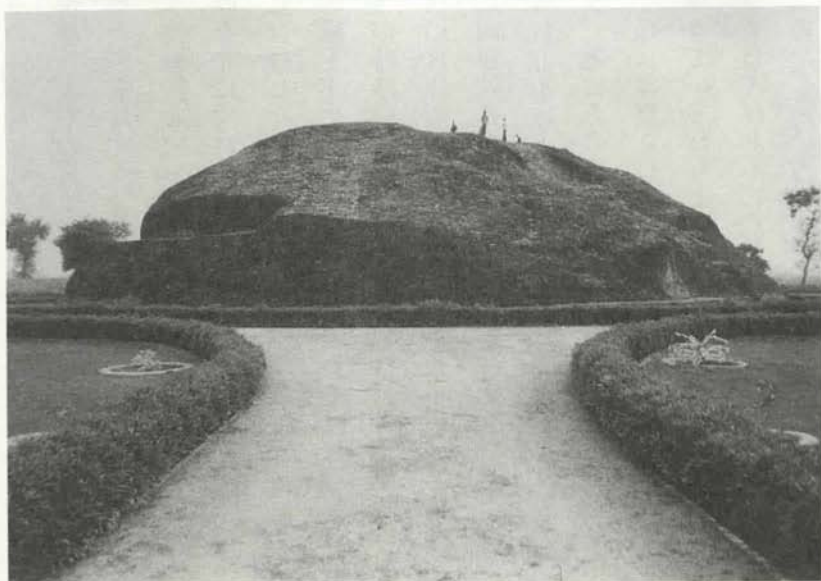
庭苑は手入れがよく行き届いていて花壇にはブーゲンビリアの真赤な花が艶を競っている。

庭苑のずっと奥にビルマ僧の建てた総大理石

の涅槃堂がある。堂の入口で靴を脱ぎ中に入ると、この附近の拔堤河の河床で発掘されたと云う、全長六メートルもある石の涅槃像が、黄布で掩われ安置されている。残念ながら写真の撮影は禁止であった。大菩提会から派遣されているスリランカ僧ヒナラターナ師が堂守りをしている。

この涅槃像は千年前のこと回教徒の侵攻にそなえて、村人達が土中に埋めて逃げたため長い間発見されなかった。堂の周辺には沢山の僧房の跡があり盛大であった昔が偲ばれる。

涅槃像の台座に阿難陀尊者の後姿と医師の像が刻まれている。この臥像は玄奘三蔵が訪れた時は、瓦積みの仏堂の中に安置されてあったと記しているところから既に五世紀頃に造られたものと推定される。仏像は金色で粉飾されその前には沢山の仏花が供さられている。赤黄の旗



茶毘所と呼ばれる火葬の地。

撮影・松本栄一

で堂内を飾り、夥しい寄進の仏具が満堂に飾られ、落着いた雰囲気も、厳肅さも、感じられないのは甚だ遺憾である。

堂の裏側に廻ると、赤煉瓦作りの円筒型の建物がある。これがアシヨカ王が石柱とともに建てた塔で、更にその後に阿難陀の塔と呼ばれている小塔が立っている。釈尊入滅の最後まで附添っていた仏弟子阿難陀尊者のため建立されたものだが、誰が建てたかは明らかでない。玄奘三蔵は「西域記」に柱と円塔を見たと記しているが柱の方は見当らない。當ては数千人もの僧が住んでいた僧院の遺跡は、インド政府により一八七三年から発掘されていて、基礎の堅牢性から推察して壮大な建造物であったことが推察される。附近には仏桑花が一面に咲いている。「阿難陀よ、されば拔堤河の対岸なるクシナガ

ラの沙羅林に赴かん」

釈尊は多くの弟子達を連れてクシナガラ^{クシナガラ}の里へやって来た。

「阿難陀よ。お前は私のために沙羅双樹の間に頭を北に向けて床を敷いて欲しい。私は疲れた。私は横になりたい」

右脇を下にし足の上に足を重ねて臥せられた。

その時沙羅の双樹に時ならぬ花が咲き、臥した仏の身体の上にハラハラと降り注いだ。仏の後に阿難陀は坐っていた。釈尊に愛され四十年余も行往坐臥その傍らを離れずに修行して来たが、遂にその存在中悟りを開くことが出来ないで仏は涅槃^{涅槃}されてしまう。滅後は誰を師として生きていったらよいであろう、と思うと胸もはりさけんばかりに悲しく

「ああ、私はまだ学^{まな}ぶべきことが沢山ある。それな

のに仏は私を捨ててこの世を去って行かれる」と嘆いた。すると釈尊は静かに

「阿難陀よ悲しむな。泣くではない。かつて私は、すべての愛^{いと}しき者でも、生き別れ死に別れて、死後その境を異にするのだと説いた。阿難陀よ作られたもので破れたり砕けたりしないものはない。お前は長い間本当によく私につくしてくれた。私のいなくなつた後は、よく精進して一日も早い迷いの煩惱から脱するようにしなさい」

と論された。また臨終の報をきいて集まつて来た人々にも諄々と最後の説法をされた。

「お前達は、決して放逸であつてはならない。私は不放逸であつたが故に、自ら正覚を得た。多くの善いことは不放逸によつて得られているのです。お前達はよく勤め精進して速やかに生

死の火坑を離れなさい。これが私の最後の説法です。私は最早涅槃の時が来ている」

傍らにいた阿難陀は、手も足も動かなくなつた仏の様子を見、落涙して

「大衆よ、世尊は今大涅槃に入られた」

と告げた。

一同は大声をあげて泣き、氣を失う者、手をあげて頭をたたく者、胸をうって泣き叫ぶ者、顔を涙でくしゃくしゃにして大地を叩く者、皆氣が狂わんほどに叫び悲しんだ。それから天人達の涙が雨となつて降り、沙羅の林は白く枯れ（註、これを屍華しかという）、大地は震動し須弥山しゅみせんが俄かに揺ぎ出した。

かくて阿難陀の指揮に従つて納棺し七日七夜の供養を終り、クシナガラクシナガラの町の東方マクタ・バマクタ・バンダナバンダナ（註、天冠寺または繫冠廟とも呼ぶ）に棺を運

んだ。ここで沢山の香木を積み重ねその上に絹の布や毛氈を敷き、釈尊の棺をその薪の上に置いて、更になから香油を注ぎ路夷ろいというクシナガラクシナガラの首長が、薪に火を点じたが燃えなかつた。

その頃釈尊の弟子大迦葉カシヨ尊者が、弟子五百人を連れ旅から帰つて来た。大迦葉は仏棺の周りを礼拝しつつ三回繞つて頌を唱えると今迄燃えなかつた棺が火を発して七日七夜燃えつづけた。仏は大迦葉の帰るのを待つていられたのであつた。

骨はクシナ国、ババ国、シヤラバ国、ラマガ国、ビルダイ国、カビラ国、ビシヤリ国、マガダ国に分けられ、それぞれ仏舍利塔が建立された。後に残り灰を納めた炭塔、髪の毛の塔、更に分骨した塔などの三十一塔が建てられた。

（教念寺住職）

小豆島紀行

文と写真Ⅱ 夏 攸吾

岬のあたりで思ったこと



島の朝。おねがいして、漁にでる舟にのせてもらう。これまでもいくどかふれてきたように、水辺にてたらいつも、なにかしら魚や漁とつきあっていたい私^{あたし}だった。

私は、再生と自浄の力を喪いかけた海、疲れきった海を愁^{うれ}える。そうさせて省みない、人間の所業を哀れむ。これは、いじめだ。こんな海を子孫にの

こすのは恥ずかしい。

人間の、子孫にのこして誇れる財産はつまるところ、食の恵みをもたらず自然環境しかない。近ごろ、農林にかわる陸のことはいう人があり、しかし島国の魚食民族でありながら、水産についてはまだその声が小さいから、私はいいつづけようと想っている。

小春日和の入江に、さざ波が天使のおしやべりのようだった。軽いエンジン音の音を響かせ、夫婦船が岬の鼻をま

夫婦舟の定置網あみ揚げ。



わり、小さな定置網を揚げにいく。

潮焼けした顔に年輪をにじませる漁師の、あまり機嫌がよくないのは、「いい時季じゃない」からだ。とても大漁を期待できる潮の状態ではないらしかった。だれにしたって、どうせなら「いいところを見せたい」のが人情。私は、もうしわけなく思う。

（ちなみに、漁民や農民に寡黙な人が多いのは、根本に自然を畏れる気持ちがあり、きつと傲慢不遜にはならないから、

だろう）

根こそぎ略奪型の乱暴な網漁がはびこるなか、幸を余して獲る定置網はやさしい網だ。

夫婦協力して袋網を三つ揚げたが、案の定、はかばかしい成果はなく。それでも夫婦は、船の水槽に獲り込んだ魚を、市場にだせるもの、しばらく蓄養してからだすもの、売れないものに分けながら手短に説明してくれ、やつといい笑顔がのぞく。ハマチ、タイ、タチウオ、アジなど……なかに毒の刺をもつゴンズイの一群れもまじって……せつないがこれも、まぎれもない日本の漁の現実のひとつだった。私たちは、魚を喰って漁を知らずにい



防波堤に干ものを乾す。

る。いま、日本の食卓は空中の樓閣だ……。

網を揚げるあいだずっと、すぐ近い岸に古い校舎らしい建物が見えており、「映画村だよ」と漁師が教えてくれる。

小豆島は、やはり、いまもつてまず『二十四の瞳』の島だった。

舟から上がって、保存された岬の分教場や映画村を観たが、名作映画の場面は脳裡によみがえらず。板壁の校舎に寄りかかり、土の校庭に見入っていたら、不意に、

「ひきょう者、恥をしれ」という叫びが、耳鳴りみたいに響いて、驚いた。

それは……私らがキのころ……みずからぶつけ、また人からぶつけられも

した、(なんと時代がかった)痛烈な終局の合図だった。どんな悪戯も、ゆきすぎた行いも、この一言で風んだ。この言葉を浴びせられた者は、ハッと夢からさめたようになるのだった。

いま、学校を荒廃させている、いじめ。想えば私らのころにもあったわけだが、ただし、喧嘩のしかたとおなじく、その限度はわきまえていた。それを教えてくれる、親身な目上や大人たちがいた。だから貧しくても、いじめられても、救いがあった。

子どもはやさしい大人が好きだが、悪戯やゆきすぎを叱ってくれない大人には失望する。軽蔑する。気をひこうにも、得体が知れないからだ。あんだ、

保存された岬の分敷場。



あたしの、なんなのさ。

わけ知り顔に知識人たちはあれこれいうけれど、究極いまいけないのは「恥をしれ」の叫びがないこと。それこそ身をもって示してやらにや、子どもたちは学びとれない……。

入江の道をもどつてくると、漁師は網を繕い、夫婦舟の相方は、値の安い小ぶりのタチウオをさばいて、干物づくりに忙しか

った。じつにうまそうな天日干しだった。が、「近所の人たちが愉しみにしている」

というものを、欲しいとはいいいだしかねた。

素麺も醤油も塩かげん

おりから十一月も末、「ことしは遅い」という紅葉の見ごろ。小豆島一の名勝寒霞溪に遊ぶ。艶やかさはいまひとつだったが、岩と緑樹と三つ巴の美観はなかなか佳い。

四方指^{しほうざし}の展望台に立つと、瀬戸内海と、群がる島々と、中国・四国の陸の近さと、そうしてこの島の成り立ちと大きさとが、一挙になつとくできた。

じつをいうと私、うかつにも小豆島は（もじどおりの、あずき島）くらいに、みくびっていた。だから、岡山の

お宿「真里」の醤油懷石料理。



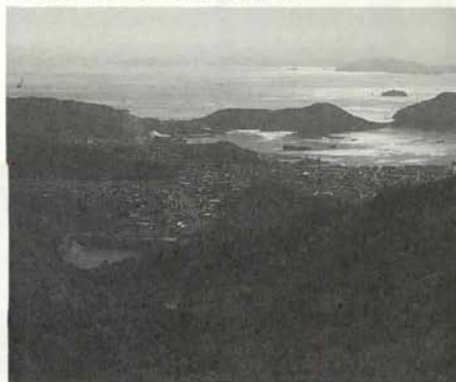
港から高速艇で西側の土庄港^{とのしよ}に着き、わけもわからないまま、宿をたのんでおいた南海岸の苗羽^{のうま}までタクシーを走らせ、そしたらチャカチャカおもしろいようにメーターがまわって、面食らってしまった。この宿「美里」^{みさと}が小奇麗で、「醤油懷石」なる気のきいた料理でもてなしてくれたからいいようなものの……。

土地の人に尋ねたら、「ここは香川県ですから（そうであつた……私にや瀬戸内圏の頭しかなかった！）、やっぱり便利なのは高松ですね」といわれた。飛行機で飛んで高松から船^{ふね}が常識。鉄道にしても、瀬戸大橋^{せと}ができたいまは、海路の便も各段すぐれた高松まで、

たいした時間距離ではない。

あらためて見る小豆島は、面積役一五二平方キロ、高低差の急な溶岩台地で海岸線も複雑、外周道路の一周に車で二時間以上かかる大きな島なのだった。見知らぬ土地を訪ねる際には、旅人は謙虚すぎるくらいでなけりやならない……。

四方指展望台から望む瀬戸内の海。





島一の醤油工場（丸金醤油）。

さて。小豆島といえば、醤油。読者のなかには私の志向に呆れる方もあろうが、食文化はなにより偽りのない領域。喰わにや生きられない人の暮らし、名産にはかならず理由^{わけ}があり、そこにその土地の本質もある。

小豆島の醤油醸造は、豊臣の時代に紀州から製法が伝えられたという。それが後年、島随一の産業にまで発展したのは、ここ瀬戸内にわが国ではもともと早く開けた塩田製塩の、歴史と技術^{ぎゅ}があったから。いうまでもなく、醤油の醸造には多量の塩^{しほ}がいる。

それともうひとつは、海運の力だ。瀬戸内海航路の要衝にあたる小豆島には、確固たる海運の基礎^{きそ}があり、その

力量のほどは大坂城築造の石材を搬出した実績で証明されている。優秀な海運力は、小豆や小麦など材料の搬入、また製品の出荷に好都合だった。

おどろくべし、明治十一年ころには、醸造家四〇〇軒あまりをかぞえたという。その後は近代化の過程で家内醸造の統廃合がすすみ、現在それでも六〇数社、ここはまさしく「醤油の島」なのであった。

島一番の丸金醤油。オートメーション化されて清潔な広い工場敷地の、奥にいまものこる歴史の染みこんだ古い醸造蔵は、馥郁^{ふいく}とした濃紫の香氣につつまれていた……。

私は、調味料といえは醤油。そして、



醤油味の麺食を好む。

小豆島には、手延べ素麺の名産もある。よく知られた「島の光」は、厳しい製品検査で品質に定評のある組合統一ブランドだ。

ではなぜ、小豆島で素麺なのか。まず、その製法は江戸時代のはじめ、奈良（三輪）から伝えられたという。お伊勢参りの旅の途次に知識を仕入れ、出稼ぎによって技術を学んだものらしい。

次に、播州（兵庫）・備中（岡山）・讃岐（香川）、原料となる小麦の名産地に近かった。明治時代には「三県小麦」と呼ばれたほどの、良質の中力粉で小豆島素麺は作られる。

さらに、しなやかで腰のつよい麺づ

くりは、粉をこねるときの、塩かげんできまる。

板状に延ばした麺生地を切る「手打ち」に対して、「手延べ」は繰返し細く引き延ばしていく。その技法に使われる、もつとも酸化しにくい純正胡麻油もまた、この島の産だ。

そうして、乾燥は天日。艶やかな麺の簾が、温暖な瀬戸内の陽光を浴びて、吸う。

素麺も酒とおなじく、いまが盛りりの寒づくり。製品は貯蔵され、「厄」を越して味がカレてから出荷される。その時季がちょうど、「冷や素麺」の恋しくなるころ……。

「ところで、オリーブは」



オリーブオイルの瓶詰め。

島人にいわれ、(そうそう)と私は想う。
明治の末に地中海から移植され、この島に実をむすんだオリーブも、いまが収穫期。そよ風を誘うように細く淡い緑の葉かげに、かわいらしい実が熟している。

私は、小豆島産のオリーブオイルの、瓶詰をはじめて手にしたときの感動を、忘れない。そのはずむような健康色の美しさは、玉のような気泡をいっばいとじこめた上等な専業^{じゅんぎょう}の瓶詰の、たおやかさと好一对。以来、わが家の料理に利用されることは少ないけれど、備えてこころゆたかな一品でありつづけている。
油をとるオリーブの熟果は黒紫。

いっぽう緑の実のピクルド加工品では、種を抜いたなかに赤いピメントを詰めたスタフドオリーブが一般的だけれど、私には、緑果をそのまま塩水に漬けただけのオリーブ新漬のほうが、さっぱりと好ましい。とくにすこし胃のおもいときなどは、とても助かるのだ。

思うに、旅におわりはない。このようにみより多ければなおさらに、熟し、醸^{あじ}されていく緑の味わいすてがたく、また次なる旅へと誘^{いざな}われていく……。
私が、無事「厄」を越してカレた味わいの年齢^{とし}になったときには、俗にいう「島四国」小豆島八十八ヶ所の霊場めぐりで、再訪をはたしているかもしれない……。

松本幸右衛門(一)

関 容子

歌舞伎で使われる髪は、女方で四百種、立役では一千種に及ぶという。髪一つでその役柄や性格の細かいところまでが表現されるからだ。

幸右衛門が最近よく使う髪は「メガネ」と「クワイ」。メガネは、「弁天小僧」浜松屋の番頭とか「法界坊」の長九郎、「源氏店」の藤八、「お染の七役」の善六など、中年の三枚目が使うもの。年齢的に髪の毛の量が少なくなっているせいで、

そのチョン髷を横から見るとメガネの玉のように丸い穴が透けて見える。これが何ともおかしい感じになる。クワイというのは「三世相」とか「梅暦」とかに出てくる医者の髪。結えた刷毛先が、クワイの芽のようにそり返っているのと似た感じなので、とても名医には見えないが。

「近ごろどうもメガネやクワイというところ

ちへ来ますね。まあどれも面白い役なんですけどね。ちよつとした見せ場もありますし……」

浅草かたばみ座で「絵本太助記」の十次郎だの「忠臣蔵」九段目の力弥だのピカピカの二枚目をつとめた経歴を持つ幸右衛門は、近ごろのメガネやクワイばかりに寄ってこられる境涯を少しおどけてばやいて見せる。これもやっぱりメガネやクワイの芸風が身についたからだろう。だんだんと得難い存在になってくる役者だ。

松本幸右衛門。屋号は高麗屋。昭和三年神奈川生れ。中村福次、三桝^{みすず}京次郎、市川^{なか}中之助を経て、昭和五十六年十月、初代幸右衛門となる。

「生まれましたのは海老名で、厚木よりもやや東京寄りです。祖父は藤川萩之丞という地方回

りの役者で、蛭間^{ひるま}座という一座を座間に持っていました。手前共の苗字が蛭間でするのでそう名づけられたんでしょう。祖父は飄々として枯れた味で、薩摩^{さつまのかみだのり}守忠度の出てくる芝居（ひらかな盛衰記）林住家の場）で庄屋茂次兵の役をやったのを見た覚えがあります、実に面白いと思いました。あたしが九つで初舞台をしたころはもう父が座頭でした。父は中村福之助、あたしは福次です。二つ違いの兄が何でも子役をつとめるんですが『先代萩』は子役が二人いるんで、兄が千松、あたしが鶴千代のほうに出まして、子役はもうそれっきり（笑）。はにかみ屋でもともと芝居が好きじゃなかったんですね。それから何人かいる妹が次々に子役をつとめていたようです。『先代萩』は、座頭の父が仁木と八汐。父の兄が中村時次と言って、播磨屋の時藏旦那



「二人三番」で翁を演ずる松本幸右衛門。

(三代目)とゆかりのある人のお弟子だったんですが、この人が立女形で政岡。そんな工合でした。ほかに出し物は『安達原三段目』とか『熊谷陣屋』『重の井子別れ』『阿波の鳴戸』とか、丸本物が多かったですね。義太夫は祖母がずつと受け持っておりました」

蛭間座は大道具や小道具衣裳一切を座で持つ

ていて、座間近辺はもちろん、茅ヶ崎、藤沢、時には山梨県へも巡業した。神社の境内にはよく舞台が常設されていたし、なければ小屋がけで興行をしたという。

「十一代目団十郎さんのお弟子さんの升之丞さんも、厚木の市川柿之助一座にいた人です。太夫元であるうちの父や祖父は、村祭り芝居を頼まれるとあちこちからそういう役者を寄せ集めるわけですよ。最初に何日間でもいくら、と話を決めて出かけると、行く先々の村の人々が荷物をリヤカーで受け取りに来てくれたり、時には牛車で来てくれて、たまにはそこへ役者も乗せてもらったりするんです。ええ、あたしも終戦後は何にもすることがないんで、父の芝居の手伝いで捕手なんかで出てました。十九くらいでしたかねえ。そのうちたまにせりふのある

役がついたりして、お客さんに手をたたかれると面白くなって……ある日気がつくと役者になっていました(笑)」

子供のころの幸右衛門は恥かしがり屋で、人前でせりふを言うなんてことは飛んでもない、と思っていたし、芝居より学校が好きだった。

高等科二年の成績表は全優で、一番で卒業した。そのうち戦争が激しくなり、相模原の陸軍兵器廠に希望就職して一年間戦車の部品を作るが、愛国少年だった幸右衛門は海軍予科練に志願する。十七歳のときだった。一年半で終戦。あと半年戦争が続いたら特攻隊で戦死していたところだったという。

「戦後、父の芝居の手伝いばかりでは修業にならないと思います、そのころ厚木に『相模の団十郎』と言われた三柵源五郎という人がいた

ので弟子になりました。師匠は京柵屋という屋号でしたが、なかなか風格のある立派な人で、今の羽左衛門さんに感じがちよつと似ています。あたしは三柵京次郎という名をいただきました。その名前で浅草のすみだ劇場で常打していたかたばみ座に出たり、父の芝居を手伝ったりしておりました。かたばみ座は全盛期を少し過ぎていたころでしたが、あたしはそこへ二年間お世話になりましたです」

かたばみ座は昭和二十五年、松本高麗^{こま}之助、坂東竹若^{たけじゃく}、坂東鶴蔵によって結成された。翌年から浅草松屋の六階にあったすみだ劇場で四年間常打したが、その後地方公演が多くなり、だんだん座員も減って、昭和四十四年八月に解散する。私はその最終公演をすみだ劇場で見ているが、みんな芸が達者で大熱演。大歌舞伎の雰

囲気とはずいぶん違う、と驚いた覚えがある。

「オーバーでしたてしょ？ お客の受けをね

らうのがいわゆる小芝居の特徴でしょう。それもまあ面白いんですけどね。で、あたしがかたばみ座にいた二十六、七のころ、市川荒右衛門という、名脇役の荒次郎さんのお弟子だった人が、この人は中車ちゅうしゃの旦那が旅回りのとき一緒に回った人なんですが、その荒右衛門さんから中車さんが弟子をほしがってるけど、お前さんどうだろうか、って話があったんです。今、中車さんのところは中藏なかさん一人しか弟子がいなから、って。考えた末に、こゝらで小芝居でついたあかを落とすのもいいかな、と思ひまして、一、二年お世話になってみようかと弟子入りしたわけで、ずうーっと弟子でいるつもりはなかったんです。それがまたズルズルと、今日まで

（笑）」

幸右衛門が中車に入門したのは昭和三十年の一月。市川中之助という名をもらう。そのとき師匠の中車は歌舞伎座で朝一番の「車引」で松王をつとめ、夜の終りに「助六」の意体で出ていた。こういう出方を幕内では「ピンキリ」と言って、役者にとってはあまり有難くないらしい。幸右衛門の中之助は、この正月興行で先代猿之助（猿翁）の「佐々木高綱」に武者の役で出た。これが大歌舞伎での最初の舞台。

「中車の旦那は歌舞伎界一のうるさ型と言われた人で、たとえば、お前今度は何に出るんだ、って訊かれて、これこれの役です、と言うと、待ってくれ、おれは丁度そのころ風呂に入るんだから断わってくれ、って言われて、三助のため

に役をおろされることもあったんです（笑）。



にこやかに昔の事を振り返る松本幸右衛門さん。

おもだかや
沢潟屋一門というのは、猿翁さんにしてもその息子の段四郎（先代）さんにしても、どういうわけかお風呂にうるさかったですね。おかげでちよつと手を入れれば湯加減がすぐわかるようになって、『寒暖計』なんて言われましたよ。自分の芸のあか、を落すために弟子になって、師匠の三助とは情けない、と思いましたか、なあに

これも修業だ、きつといいこともあるだろう、
と思って辛抱しました」

その、いいことはじきにあった。中車がラジ
オの「物語」の番組に出演するに当たって、「宮
本武蔵」や「半七捕物帳」などを放送一回分
で何枚というふうに、幸右衛門が台本を構成する
役に師匠から抜擢されたのだ。ここに全優で学
校を卒業した幸右衛門の頭のよさが生かされ
る。

「その一回にもヤマ場があったり、ちゃんと筋
が通るように考えて書くわけです。駄目ならす
ぐにおろされたでしょうが、続けて書かせても
らえました。いいお金がもらえたのも有難かつ
たです。放送局からお金が出ると、お前、原稿
料だよ、って師匠が渡してくれて、実にこれかい
気分のものでしたねえ」
（コラムニスト）

現代の快僧 最終回

浄土宗 一行院住職

八百谷靖臣さん

大事故現場の 極限のなかで

取材・文 稲葉小太郎

深い群青色が果てし無く広がるインド洋のなかで、その部分だけが緑色の蛍光染料で鮮やかに輝いていた。



やおたに・せいきよう●1937年東京に生まれる。大正大学浄土学部卒。
72年のインド・ニューデリーの航空機事故以来、12回もの海外での事故
現場に赴き、遺族の精神的なケアに携わっている。

ヘリコプターはその緑色を目印にゆっくりと
右に旋回、機首を北東に向けると三分ほど直線
飛行し、空中に停止した。

ひとりの僧が読経とともに水と香を海にそそぎ、極楽に咲くという蓮の花びらをかたどった紙をまいたあと合掌した。

つづいて乗員がロープをつたわって海面まで降り、海水をくみ上げた。この海でつい一週間前に起こった航空機事故の、犠牲者の位牌の開眼供養につかうためだ。

ときは一九八七年十一月。インド洋モーリシャス沖三百キロの地点でのこと。台北発ヨハネスブルグ行きジャンボ機（乗客乗員あわせて百五十九名）が消息を絶った。即座に国際的な捜索活動が展開されたが、数名の遺体と機体の破片が見つかっただけだった。せめて現場を見たいという遺族の願いを実現すべく、現場水域の上空で、法要が行われたのだ。

読経が続くなか、遺族から依頼された供養の品々や花束が投下される。子どもたちから遭難

した父へあてた手紙もあった。

ふと目をあげるとはるかあなたに西の空が見える。

僧は思った。

あそこに阿弥陀さまのおいでになる極楽浄土があるのだろうか。

葬儀ではありません

信濃町の駅にほど近い浄土宗一行院の住職八百谷靖匡さんは、このモーリシャス沖の航空機事故をはじめとして、日本人の犠牲者を出した海外での大きな事故の、直後の現場に十一回も立ち会っている。

一九七二年六月 インド・ニューデリーの航空機事故

一九七四年四月 インドネシア・バリ島の航空機事故

一九七九年十二月 ニュージールランド・南極の航空機事故

一九八三年十二月 スペイン・マドリードの航空機事故

一九八四年九月 パキスタン・ギルギットのバス事故

一九八六年二月 台湾南投県のバス事故

一九八七年六月 フィリピン・バギオの航空機事故

一九八七年十一月 モーリシャス・インド洋上の航空機事故

一九八八年三月 中国上海の列車事故

一九九一年二月 スペイン・エシハのバス事故

一九九二年七月 ネパール・カトマンズの航空機事故

一九九三年八月 ネパール・カトマンズの国内線航空機事故

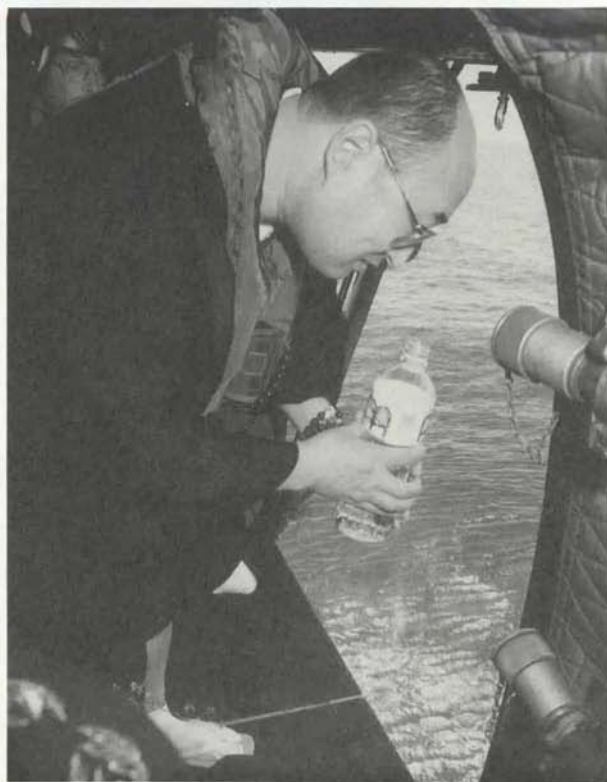
その後、一周忌や三回忌の法要に同行したのも考えれば、現地に赴いたのは三、四倍の数字になる。

初めてニューデリーへ行ったときは『世界の葬儀』（新潮社）の著書がある松涛弘道さんと一緒だった。実は松涛さんは八百谷さんの五歳年上の従兄弟なのだ。

最初は松涛さんに誘われて行ったのだろうか？ 聞こうとすると、ちょっと待ってください、とさえぎられた。

「勘違いしないでいただきたいのは、私たちは葬儀にいつている気持ちとはまったく不一样です。事故があつて、多くの日本人が突然亡くなります。現場に駆けつけた遺族は途方に暮れてゐる。そこで、少しでもお役に立てることはないか、という気持ちで現地に行っているわけです。衣を着てセレモニーを行うのは最後の最後。」

それまでの遺族の精神的なケア、亡くなった方の魂と遺体をいかにトラブル無く日本に帰って帰ってくるか、交渉のアドバイスや取り次ぎ、書類作成の手伝いなどをやるのだという。



モーリシャス・インド洋上の事故現場で、日本から持参した水をヘリコプターからまく八百谷さん。

たとえば冒頭に書いたモーリシャスの事故の場合、インド洋のまんなかで起こった惨事だけに、遺体や遺品はほとんど見つからなかった。ところがそれでは遺族は納得しない。そこで窮余の策として、飛行機が落ちた現場の水で位牌の開眼供養をすることによって、遺族の気持ちを鎮めたのである。

これは機転とかアイデアとかいうものではない。生と死が交錯するぎりぎりのところで生ま

れた、知恵とも呼ぶべきものだろう。

日本でお坊さんの仕事といえ、葬儀社がすべて整えたところへしずしずと現れ、お経をあげて帰っていくというイメージが強い。八百谷

さんの活動は、それとは大いに違いがある。

無我夢中の仕事

八百谷さんが初めて海外の事故の現場に立ち会ったのは一九七二年のこと。インド・ニューデリーで日本人を乗せた飛行機が墜落。航空会社から相談を受けた葬儀社が八百谷さんの父に相談した。

「だったら松涛という、ハーバード出ているのがあるよ」

父のひとことで松涛弘道さんが行くことになり、八百谷さんも助手として同行することになった。

ふたりはとりあえず現場に直行した。事故から四、五日は経過していたが、ジャムナ川から飛行機の尾翼が突き出ていた。さすがに遺体だけはもう片づけてあったが、どこから手をつけ

ていいのかわからない。やることなすことぜんぶ手探りののだ。

こちらの遺族は何宗の信者さん？ どういう供養をしたいのだろう？ その場その場で相談しながら進めていった。

あとで思い出してみると、インドの事故に関しては記憶がほとんどない。とにかく無我夢中だった。

「おれはこっちの遺族のところへ行くからお前はあっちへ行け」

「おまえはあのひとの火葬に立ち会え」

自分で、なにかを考えている余裕はない。なにしろ目の前にいる、狂乱状態にあるひとたちを慰めて、安らかな気持ちで日本に返さなくてはならない。

「そのために、ただ、先代から教えられたことを、そのまま実行しただけです」

事故の現場に立ち会って、八百谷さん自身はどんなことを考えたのだろうか。

「そうですね、いつ死んでもいいなあと思いましたがね。日本にいて、日常的なお寺の仕事をしているかぎりには、みんな病院で死ぬから、こういう場面に出会うことはありません。今になって思えば、有り難いことだと思っています」

その二年後の七四年、こんどはインドネシア・バリ島で、日本人の観光客を乗せた飛行機が飛行場を間違えて、手前の山にぶつかって大破した。

知らせを受けた八百谷さんは衣だけつかんで直行したのだが、とにかく現場は山の奥深く。ヘリで兵隊を降ろして樹木を伐採し、それからレンジャー部隊を降ろして遺体を収容した。ところが遺体の損傷がひどく、確認できるような状態ではない。

そのまま飛行場に持っていくって、火葬しようということになった。

FBIがまず肌の色から人種で分けよう、と言いだし、黒人と白人と黄色人種とに分けた。日本人に関しては火葬して、遺骨をみんな分けてしまうということになった。

「なにしろこれしかないんだから、納得してくださいと頼みました」

亡くなったのは何十人のひとなのに、遺体はお棺ひとつかふたつに納まってしまった。現地のひとに櫓を組んでもらって、火葬。それを骨揚げして、瓶にいれてもってかえってきた。

航空機事故の無残な遺体を目の当たりにしたのはたしかにショックな体験だったけれど、このへんまでは無我夢中。自分でなにしてるんだかわからない状態だった。

悲しみはさまざまに

こうしたことは、回数をこなしたからといって慣れるような問題ではない。毎回、事故の様子は違ふし、遺族の反応もひとりひとり違ふのだ。

七九年のニュージールランドは、南極の観光飛行機がブリザードの直撃によって墜落した事故だ。オークランドへ行っても遺体は到着しておらず、ただ待つしかなかった。

空軍がハーキュリーズでピストン輸送するのだが、氷が溶け出して作業は難航。結局二週間近くも待たされることになる。そんなとき日本人の遺族は悲しみにくれ泣いている。外国人の遺族はボランティアが、トロリーリングに行こうとかさかんに誘っていた。アメリカ人などは、気をまぎらすのが上手のようだった。

ところで外国人にくらべ、日本人は遺骨に執

着するという話を聞いたことがある。

「そうですね。日本人は、必ず死んだ場所に行きたがりです。極楽への入口を確認したいんですね。また、もし遺体が見られれば確認するし、それがなければ遺品が必要です。それで初めて納得するんです。それが日本人の死に対する考え方なんです。」

遺族のお年寄りのなかには、

「うちの子はものすごく頑丈だから、機体のかげで生きているかもしれない。ぜひ現場に連れていってくれ」

と云いだすひともいた。可能性がないのは分かる。それでも、現場に行きたいのだ。

スペインのマドリッドでの事故は飛行機と飛行機がぶつかったもの。

八百谷さんは遺族と一緒に現地に着き、彼らをなぐさめ、遺体の確認に立ち会った。それま

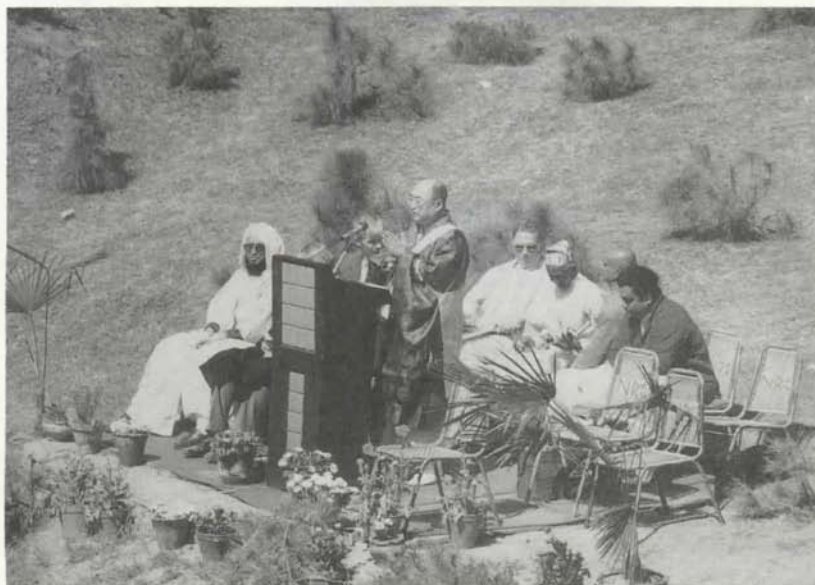
では法衣は着ずに、洋服で通した。彼らは正確に言えば、まだ遺族ではない。遺体を確認するまでは、「犠牲者の家族」なのだから。

このころは日本人の死亡事故がおきたら八百谷さんに頼めばいい、という評判ができてつつあった。

ところでこのように海外に行くときは、報酬はあるのだろうか。

「遺族から御布施という形で包んでもらうことはあります。旅行社や航空会社から、出張を頼まれたときはドネーションをもらうこともある。でもそんなものあてにもしないし、遺族がこちらやすらかに帰ってくればそれでいいんです」

このように言う八百谷さんだが、仏教界できちんと評価されているとは思えない。あるとき先輩に八百谷さんが帰国のあいさつに行ったときのこと。



事故現場近くで各宗教の合同葬が行われる。持ち時間は一人5分位しかない（ネパールにて）。

「ただいま帰りました」

と報告すると、

「いや、ごくろうさん、いや、だけど君はいいねえ、ただで外国行かれて」

宗門の先輩の言葉である。お坊さんというのは準備がすべて整ったところに出ていって、一声うなつて帰ってくれば感謝されると思つてゐるひとが多い、と八百谷さんは言う。

「現場ではね、お経を読むなんて最後の最後。やつとお経を聞いてくれる気持ちになつたか、というときまで待たなければいけません。それまでは袈裟なんか着ないで、汚いかつこうして駆け回っているんです」

阿弥陀さまの受け売りです

一行院はJR信濃町駅を降りてすぐ、首都高速の真下にある。創建は江戸時代。徳川家康と



ともに東京へ移ってきた永井信濃の守の、屋敷の片隅に庵を作ったのが最初だという。八百谷家が住職をするようになってからは四代目になる。

八百谷靖匡さんは一行院三十三世八百谷孝保さんの長男として、昭和十二年に生まれた。子どものころは朝早く起こされて、お経をきびしくしこまれた。

反発した八百谷さんは、中学校から一切お経なんか読まないと言言。かわりに飛行機の世界にどんどん深く入り込んでいく。

航空機事故に深く係わっている八百谷さんだが、実は飛行機との関わりはずっと古い。子どもころから、たいへんな飛行機マニアだったのだ。

不思議と言えば不思議な縁である。

最初は戦争が終わってすぐのこと。もう日本



事故からおおよそ半年後、日本からの遺族だけで法要が行われた（ネパールにて）。

の飛行機が飛べなくなるといふときに、松戸の航空隊にいた叔父が戦闘機を引っ張りだして、疎開先の栃木近龍寺のうえを何回も何回も旋回してくれたのだ。

「きれいだなあ」

そのときの飛行機の色は、いまでもはっきり覚えてる。

将来は航空関連に進もう。長男だけど寺を継ぐ気はない、やりたいことやるんだと思っていた。

航空関連の仕事ではもちろんパイロットが一番だが、飛行機的设计、運行する航空会社、整備……どんなことでも携わっていたと思った。

大学は法政大学工学部に入学。航空部に所属し、いつも飛行機の近くにいた。だからグライダーや小さい飛行機なら運転はお手のものだ。

法政には四年間いたのだが、本人の弁による

と「飛行機ばかり乗っていたもので卒業証書もらえなかった」ために、中退して大正大学へ。三年から編入して浄土学を学んだ。

それでも、お坊さんをやる気はなかった。アルバイトで全日空の羽田の整備所に入ったり、本田技研のエアポート部門に行って、全日本飛行機ラリーの手伝いをしたこともある。

そんな八百谷さんがお坊さんになろうと思ったのは、父が死んでからだという。

「考えてみればとんでもないせがれだったんでしょ。親父は浄土宗一直線のひとでしたから。それに、今思うと、教えてくれたことが役に立っている。感謝しています」

極限の状況のなかで、阿弥陀さまにおすがりすることもあるのだろうか。

「実際に感じるのは、終わったときですね。みなさん、涙を流しながらお礼を言って帰ってい

くけど、お礼を言われるようなこととしたことあるのかなあ、と。考えてみると、阿弥陀さまから教えていただいたことの受け売りですよ。あたしや。自分の力でできることじゃない。そう思うとね、ひとりでに手が合わさるんですよ」「法然上人というのは素晴らしい方だと思えますよね。山のようなお経のなかから、この教えを見つけて出してくださった。最後は阿弥陀さまにすがればいいと思うだけで、こころがやすらぎますよ」

欲しいのは後継者

こうした大きな災害の場合、アフターケアもたいへんだ。昨年はネパール・カトマンズに遺族とともに三回忌法要に行ってきた。現在でも一年の三分の一が海外をまわる生活だ。

そして今、こうしているあいだにも、事故が

起きていないとは限らない。そのときは線香や位牌などの最低限の荷物を二、三時間でまとめ、飛行機に飛び乗らなければならない。つねに心の準備が必要だ。

「もう年だし、ハードですよ。後継者が欲しいですね」

これだけの活躍をしている八百谷さんが、実はお坊さんの位としては下のほうの「小僧都」のままなのだというのも不思議な話だ。

「私は坊さんの世界で偉くなろうとは絶対思いません。位を上げたかったら自己申告しろと言うんで、いつもほおっておくんですよ」

大本山で行なわれる御忌などでは、大学を出たばかりのような若者にまじって、一番すみっこに並んでいる八百谷さんの姿がある。

「こういうお坊さんもいるんですよ」

八百谷さんはいたずらっぽく笑った。

教育の現場から

授業からはみ出してもかまわない
たくましく学ぶ子がいい

ゆうび小さな学園 代表
大妻女子大学大学院 非常勤講師

内堀照夫

内堀照夫先生は永年小学校の教諭をされ、退職されてから、千葉県柏市に、「ゆうび小さな学園」を設立された。

この学園は、学習塾ではなく、今の学校教育では実現が難しい、子供一人一人の個性、特性をの

一、「先生は、センセイだもの。本なんかなくって勉強出来るでしょ」

チャイムが鳴ってみんなが席に着いた。しば

ばすための手作り教育を行うとうとするへ私塾Vである。

先生の今の子供達への思い、教育の原点について、六回に分けて連載していただく。

らくすると遊太は、すたすたと先生の前に進んでいく。一年生の国語の時間である。

「先生、本貸して。忘れてきちゃった」

「貸してあげる本はないワ」

「先生の本貸してよ」

「先生の本貸しちやったら、お勉強出来ないワ」

「先生は、センセイだもの。本なんかなくったつて勉強出来るでしょ」

「そうはいかないワ」

「先生のケチ。そんなら隣のN子さんに見せて貰うからいいよ」

悪態をついてどんと自席に戻っていった。

遊太の机の中は、ごみ箱のようにめちゃくちゃだ。教科書やノートの角はめくれて折れ曲がっている。プリント類がしわくちゃになって詰め込まれている。牛乳瓶のふたが十数枚も転がっている。芯が折れて短くなった鉛筆が二、三本と、細かくちぎられた消しゴムが隅っこに転がっている。

遊太は、日常的には担任教師に絶対の信頼と

愛着を持っている。それは、彼が母親の生き方から自然に学びとった、他人を信じて、疑うことを知らない、恐れることを知らない接し方なのである。

教師の応対も快い。少しも権威を感じさせない。遊太と対等に渡り合っている。学習のルールも振りがざさない。叱りもしなければ指示もしない。もっとも、指示を待つ遊太ではないが――。

二、「うん、お醤油もおいしい」

遊太の母親は、勤めをしていて忙しい毎日ではあるが、遊太には心地よい愛情が注がれている。「子育て」に特別な信念や方針があるわけではない。一緒にいられる貴重な時間である夕食

時――。

「あ、ソースが切れていた。買って来るのを忘れた。遊太、お隣のKさんについて、おソース借りてきて」

「ピンポン鳴らしたけど、だれも出てこない」

「じやいいか。お醤油で我慢しようよ」

「うん。お醤油もおいしい」

母子のこうした会話が日常生活の中でいくたびとなく交わされてきた。そこで育った遊太は、状況を即座に捉え、それに対応するすべを身につけてきている。いつとはなしに、選択力・決定力・実行力・挑戦力・適応力・忍耐力などが培われて、たくましく豊かに生きる素地を身に付けつつある。

遊太の母親には、子どもへののめり込みが感じられない。自分自身の生き方は大事にしてい

る。

少子化の時代では、大人の子どもへの関心と、養育・教育への手数が増大する。なかには、例えば学校の時間割や授業、給食の献立、帰宅時刻など、担任教師に劣らず知っている。帰宅時間が少し遅れると子どもを迎えに行く。帰宅するとすぐに、子どもの肩からランドセルを外し、中を調べて連絡帳を読む。子どもからは何の要求もないのに、明日の準備をしてあげる。子どもが空腹を訴える前に、子どもが好むおやつを出す……、などを日課としている母親もいる。

子どもの気持ちを先取りして、それを満たしてしまう状況の中では、子どもは、自分で感じたり、考えたり、物事を自分で決定する経験が欠いてしまう。

三、「先生、本人から直接言ってもらったら」

五年生の社会科の授業研究会に参加する機会があった。学習指導案の「学級の実態」の欄に「(前略)しかし、男子に一名学習のルールから外れて、自己中心的な言動に走る子がいる。(後略)」とあったので興味をもつてその子、「ルールから外れる卓治」に注目してみた。

日本の工業の内「自動車工業」の学習であった。「このプラモデルの自動車は、内田先生が作ったんだけど、どれくらいの時間がかかったと思いますか。およそ三百個の部品を組み立てたそうです。予想をワークシートに記入して下さい」

の教師の問いかけに、子ども達は、自分の経験を基に三百ピースなら「五時間かな。二時間ぐ



「大型パズル競争」に知恵をしばる子ども達。

らい。十時間はかかるな」などとおもいおもいに記入していった。

「さあ、記入できたようね。それでは、正解を発表しますよ。なんと……」

今、担任教師が発言しようとした、その瞬間だった。卓治は

「先生、本人から直接、言ってもらったら」と声をかける。

確かに、今は授業研究。プラモデルの自動車を作った隣クラスの内田先生も授業を見ているのであった。卓治の意見は至極当然である。直接制作者から聞くことの方が事実が正確に、しかも臨場感を伴って伝わってくる。

担任教師は、

「そうね。それがいいわ」

と、受け入れて学習は進められた。

子どものこうした発想は、しばしば教師の予想を越える。教師は、指導の計画に捕らわれないうで、柔軟に対応する用意がなければならない。

四、「先生、実物を直接見た方がよかつたんじゃない」

次の段階に進んで、

「それでは、本当の自動車を見てみましょう」と誘いかけて、担任教師は、四つのドアとボンネット・トランク、全てを開け放った自動車をいろいろな角度から撮影したビデオの映写を始めた。多くの子どもが吸い付けられるように見始めたときだった。

「先生、ビデオにしなくても、玄関の側に車があるんだから、実物を直接見た方がよかつたん



親子で「おんぶ騎馬戦」——親の背中からたくましさの一步が。

じゃない」

と卓治。的を射た発言である。担任教師にすれば、子ども達を外に連れだしてまとまりがつかなくなると困るとか、ビデオの方がみんなが集中して、同じ視点で観察するだろうなどと考えて、この手法を採用したのであるが――。

例え見慣れた自動車であっても「何個ぐらい、どんな部品が使われているのだろうか」という問題意識をもって臨むのだから、五感をふるに働かせて観察するであろうに。また、子ども達は一人一人自由に、ある子は、自動車の全容を見回してたくさん部品を書き出すだろう。またある子は、車輪だけを熱心に見つめ、車輪の部品については限なく調べあげるかも知れない。そんな違いが次の授業を躍動的なものとしていくであろうに。その上、子ども達一人一人

は自分自身の学習を楽しみ、自分の学習の方法も発見していくのだが――。

五、「先生、組み立てだけの時間ですか」

授業は進む。

「本物の自動車は、約二万個の部品が使われていることが分かりました。本物の自動車が一台出来るのに、どれくらいの時間がかかると思いますか。自分の予想をワークシートに記入して下さい」

の問いと指示。意図を素早く素直（？）にくみ取った多くの子ども達は、ワークシートの所定の欄におもいおもいの時間を記入し始めた。

ところが当の卓治は、

「組み立てだけの時間ですか」

「エンジンをつくる時間もいれますか」

「椅子や車輪を作る時間もあるけど……」

「それに、一台だけを作っているんですか」

などと、矢継ぎ早に質問を繰り返して来る。

担任教師としては、子ども達に「三百ピースのプラモデルの車を組み立てるのに二十時間掛かったのだから、約二万個の部品が使われている本物の自動車は大変な時間を要するだろう」との予想を立てさせる。次に「実際の自動車工場では約二分に一台の割合で組み立てが可能である」という種明しをして、子ども達に圧倒的な驚きを与え「どのようにして組み立てているのだろうか。どんな工夫があるのだろうか」などの学習問題を、切実感と必要感をもって捉えさせようとの授業展開の過程で発した問いである。

卓治の質問のように厳密に区分しているわけ

ではない。また、それらの質問事項こそ、子ども達がこれから追求していく学習内容として捉えて欲しい事柄なのである。従って、答弁も自ずと曖昧になってしまう。

卓治は、教師のそうした意図まで察する由もない。ひたすら自分の予想的中率を高めるためにさまざまな場合と条件を整えたいのである。

「自己中心的な子ども」などではない。ここには、他の子ども達とは違った彼の学習への強い意欲と、自力解決へ心弾ませている様子がうかがえた。

六、「自己中心的で、学習のルールを守らない子ども」

しかし、卓治のような子どもを学級の一員と

して抱えている教師は「自己中心的で、学習のルールを守らない子ども」と見なす場合が多いのではないか。

少なくとも教師は、足並みの揃えにくい、異なった学習スタイルをもつ子ども達に手を焼くことが多いものと思われる。

遊太や卓治のように、自分で見て自分で感じ、自分で考えて自分で決め、自分で実行して、自分で喜んだり悲しんだりしている子どもこそが、二十一世紀を個性豊かな存在感のある人間として生きていくのである、が。

私たちは、子ども達の自由を保障し、自発的に活動させ、自由に思考させ、一人一人の子どもの個性・特性を大事にして、それを伸ばすことの出来る親や教師になる努力を続けなければならない。

共に生きる

— ブナ原生林から —

カメラマン・御所野洋幸

日本カモシカとの出会い

「趣味は？」と聞かれると「岩魚釣りです」と即座に答えて三十年近くになる。釣りにカメラを持って行ったのは、ほんの二、三度だ



け。それも釣果とアウトドアライフの記録のために、カメラを持って出かけるのは、仕事を依頼された時だけであった。

仕事で全国各地の四季の風景に接し、人工的な景観も自然そのものも、それなりに感動

を受け、自分なりに記録表現したつもりでいる。

平成元年、秋田県森吉町役場の企画で、ノロ川地区のブナ原生林の紅葉を目のあたりにする機会に恵まれた。

十月十三日、前日までの雨が残り、雨、曇り時々晴れの忙しい空模様である。

キャンプ場近くのノロ川橋で車から降りる。「ワー、なんとという美しさだろう」。私は大きな衝撃を受け、言葉をなくした。そして動くこともできず、ただ「ワー」と唸りながら、その風景に見とれていた。

私の人生五十二年間で、これほど自然のうつくしさに感動したことがあっただろうか。「きれいだなあ」という、通り一篇の褒め言

葉では物足りない。「うー、すごいなあ、すごい」と繰り返し返していた。

同行の人たちのシャッター音が私を現実に戻した。手元にあるのはキノコ狩りのカゴとナイフだけだ。「毎年紅葉は見ているけど、こんなきれいな紅葉は初めてだ」と、地元の年配の女性の声がする。カメラを持って来なかったことを悔やんだ。

日程通り東京に帰り、日常の生活に戻った。仕事が終わる、家に帰ってテレビを見ているだけで、頭の中はあの原生林の紅葉の感動でいっぱいになっていた。もし、あの時カメラがあったら、あの美しさ、あの感動を写し撮ることが私にできただろうか。撮れる、いや難しい、でも撮りたかった。撮りたい。あの

美しさが来年もあるだろうか。酒はすすみ、酔いは身体中に回り、テレビはいつの間にか時代劇からニュースに変わっていた。

こんな日が一週間ほど続いたのだろうか。やっと撮影計画をたてた。

「ブナ原生林の四季」。撮影開始は春の新芽の時と決めた。そして、平成二年のゴールデンウィークから、東京と秋田県の山のキャンプ場との往復が始まったのである。

掲載の写真は、平成六年二月に撮影した。

十三日、国民宿舎「森吉山荘」に着く。ここに一泊して明十四日に山行きと計画を建てたが、外は激しい吹雪である。夕食時のテレビでは、各地で山の遭難者が続出していると

いうニュースだ。明日の晴天を祈りながら床についた。

十四日は朝五時に起きた。外はまだ暗い。懐中電灯を持って外へ出てみる。ヒューヒューと音をたて、パウダーのような雪が足元から吹き上げてくる。山行きは断念。昼食後、カメラを持って山荘の近くを歩き回る。

カモシカだ。道路から十メートルほどの斜面の藪、そのくぼみからジーツと私を見ている。体の半分は雪の中だ。五メートルほど近づいてみたが動かない。ファインダーをのぞき、シャッターをきった。しかし、なにか悲しげな目をしている。怪我をしているのかもしれない、と思った。急いで山荘に戻る。相談の結果保護することに決め、山の動植物に

くわしい山荘の庄司氏とカモシカのもとに駆けつけた。側に行くと、頭を上下して角で威嚇する。逃げようとしないう。目隠しと防御のため毛布を頭からかけ、首にロープをつけて引いてみた。右の前足を少しひきずりながら十メートルほど歩いたが、後は動かない。二人で抱いて運ぶ。重い、私は後ろの方を持った。最初は少し暴れたが、後は時々足で蹴るしぐさをするだけでおとなしくなった。

“どうしてこんなことになったのだろう。

このカモシカの家族はどうしているのだろうか。股のあたりを、子供をあやすように手でたたきながら、庄司氏と吹雪の中をヨタヨタ進む。腕がしびれ、汗が流れる。休み休みや々と山荘にたどり着いた。

二時間後、係の人が来た。

病気で死期が近いと言う。専門家の見立てが間違っていることを祈りながら、その夜何度かカモシカを訪ねた。腹部をさすってやつても動かない。ジョツと私を見ているだけだ。なにもしてやれない自分が悲しい。

翌日、カモシカに「元気になれよ」と言葉を残して、撮影に出る。しかし、昼食に戻るとカモシカは死んでいた。暖かい部屋の毛布の上で、目の前のキャベツも白菜も食べずにまぶたを閉じていた。

悲しそうな目、あの重い体と温もりは今も私の中に残っている。体長九十センチ、体重四十八キロ、年齢十一歳、雌の日本カモシカであった。

伝えるといふこと

私のアメリカ留学記(二)

佐藤雅彦



壁ぎわの萎れた花のよう

その女人^{ひと}は、ヒールの音をコツコツと響かせてこちらへ向かつて来る。明らかに私に向かつて

佐藤雅彦(さとうまさひこ)●大正大学総合仏教研究所研究員、東京都文京区浄心寺僧侶。一九九二年五月より一九九四年三月末まで、アメリカ・ワシントンDCジョージタウン大学ケネディ倫理研究所へ。浄土宗海外研究生として「生命倫理学」を学び留学。

て歩いてくる。留学先のアメリカ・ワシントンDCに着いてまだ三日目、ジョージタウン大学のブック・センター(一般図書、教科書や文具類からTシャツまである大学の総合的売店)で

のことだ。私は昼休みを利用して雑誌の置いてあるコーナーで首を横にひねってどんな傾向の雑誌が置いてあるかを探索していた。平積みや表紙を見せて置いてあればまだいいが背表紙を向けて並べられていると、活字という活字がローマ字だらけだと、首を横にひねるか傾けるかしないと読みにくくてしかたがない。帰国後しばらく経った私の部屋の本棚も英語の本は、立てて並べず横にして積み重ねている。帰国して私が思った重要なことは日本の女性はきれいだということだ。みんなきれいに化粧をして、きれいな「よそ行き」を来てストッキングをはきハイヒールで歩いている。ワシントンやニューヨークといったアメリカを代表する都市でも、ストッキングにハイヒールというスタイルで歩いている女性は少ない、というよりむしろ希れだといってよい。スカートにストッキング

グよりパンツルックといわれるパンタロンとかズボンに類する機能的な格好か、スカートをはいている女性も素足の場合が多く「装う」というよりは、「ナチュラル（自然体な）」という譬えが似合っているように感じた。だから日本の多くの女性が身に着けているスーツやスカートにストッキング、ハイヒール、高級なバッグというスタイルはアメリカでは、バリバリのキャリア・ウーマンのもつイメージを連想させる。

そして私に向かつて歩いてくる女人はまさにキャリア・ウーマンの雰囲気であざやかな金髪美人。確かに彼女は私の正面で立ち止まった。私の眼を見るなり「ハイ」と明るく声をかけてきた。私はなんだか信じられないような瞬間が起きている気がした。欧米の人は積極的だと聞いたが、まさかアメリカに来て三日目で早くも金髪美人から声をかけられるなんて。

しかし次の一言を聞いた瞬時、私の思い上がりはサッと血の引くように醒めていった。

「あなたは、なぜ我々のデイスカッションの間、何も喋ろうとしないの？」それは明るい語りかけの言葉ではなく、むしろ抗議のひと言と言った方が正しい。しかしこの時、私はこの美人になぜ抗議されなければならないのか判からなかったのだ。つまりこの美人が何者で誰なのか判らないのだ。もともと私は、寺の生活をしても檀家さんの顔と名前を憶えるのが不得手で、ひと目、檀家さんの顔を見ただけで、名前、家族構成、職業などが頭にインプットされている姉の能力が不思議でならないほどだから、白人の女性とは皆同じ白人女性に見えてしまい一向に区別がつかない始末なのだ。一年十ヶ月の生活でも、同じユニフォームを着ている神父だと四十代の白人は皆同一人物に見えてしま

い、ジョン神父と話しているつもりが相手はケビン神父だったという失敗がたびたびあった。

彼女は、私がアメリカに着いた翌日から参加している留学受け入れ先の研究所主催の国際集中セミナーに同じく参加しているイタリア人の女性医師だった。それが判ったのは、彼女の胸にも私の胸にも国、所属機関、名前を印刷された名札を付けていたからだ。このセミナーには世界三十数ヶ国から医者、看護婦等医療従事者や法学者を中心として百数十名（日本人は私を含めて二人）の、生命倫理に関わる人々が一週間のプログラムのために集まって来ている。全員で一時間半の講義を聴いて、充分に自分の意見を言える人数の十人前後の小グループに分かれて一時間半のデイスカッションを行い、それを午前午後繰り返し返すといったプログラムが一日の基本となっている。彼女は私が所属した小グ

ループの中にいた一人だったのだ。

無論、渡米前に英会話のレッスンは行っていた。しかし、着いた次の日の朝八時半から夕食を終わるまでの十二時間余り英語にどっぷり漬かって緊張を保ち続けていなければならない。

「駅前留学」のような生徒のレベルに合わせた会話ではなく、情け容赦ないスピードで英語は飛び交う。正直なところ、やはり本場ものは違うのである。それに引き替え欧米の人達は積極的なディスカッションを行う。私のグループは、ドイツ、カナダ、イタリア、アルゼンチン等、英語を母国語にしない人々が、黙っているのは損だとばかり意見を並べ立てる。

「あなたは、なぜ我々のディスカッションの間、何も喋ろうとしないの？」という彼女の質問に私はこう答えた。

「私の英語の能力は充分なものではないので

す。皆さん方のディスカッションの内容の五十パーセント判っているかどうかという程度で、意見を言えるレベルではないのです」

「そんなことはないでしよ。私はあなたが話している英語の内容が充分理解できます。あなたは、こうして私とても充分にコミュニケーションをとれているじゃないですか。もっと話すべきです。みんなが意見を分かち合ってこそディスカッションの意義があるのです。もっと楽しむべきです」彼女の口調は、怒っているようには見えないがその瞳には厳しいものがある。この美しくしかも辛辣な彼女とコミュニケーションできたことを喜ぶべきなのか戸惑いながら、私は付け加えた。

「親切な忠告を有り難うございます。しかし私は、生まれて初めて英語を実践として使ったのは一昨日からなのです。このセミナーでは、皆

さん方のディスカッションの雰囲気味わうだけで充分満足し、楽しんでゐるのです」

「オーケー、楽しみましょ！」と、彼女はまたヒールの音を響かせて立ち去って行つた。私は内心ホッとして溜め息をついた。その日の午後、小グループの時間、私はいの一番に口上を述べた。それは彼女に説明したと同様に英語力の理由で発言しないことの弁明であり「どうぞ私にご心配なく、私は皆さんの意見を聞くだけで楽しんでゐるのですから」と釈明したつもりだった。しかし欧米の文化を知るに従いそれは、愚かしいコメントだったと思ひ知った。

ディスカッション、議論することを欧米の人達は重んじると聞いていた。それはこのセミナーだけのことでなくその後の留学中いつも実感していた。少なくとも私の受けた教育では、「人の話は黙って聞け」と教わつた。静かに

相手の話を聞いた後で質問があつたらするようにと習つた。じっくり相手の考えを熟慮することは徳目のひとつだと信じてきた。小グループで機関銃のようにやり取りされている議論のあら筋は概ね判つても、微妙な議論のポイントまで理解するところまではついてゆけない。みんなの意見を聞くだけで楽しいというのは負け惜しみで、こんな状態でこれから研究生生活ができるのだろうかと不安が頭をもたげて来る。語学のクラス用の狭い部屋に十数人が椅子を丸く並べて円をつくる。自信の無さは座り方にも現われる。まあいい円で私の椅子だけが椅子半分壁の方に凸を作ってしまう。壁ぎわの萎れた花の如くならざるを得ない。「知識」や「学ぶ」ということは、自分より能力の上の（権威ある）人から教えてもらう、習うという受け身の姿勢で取り込もうとしてきた我々の文化に対して、

欧米のそれは「知識」の提供者の能力が自分より同等か劣る者でも、互いの意見を交流させて表現し合うところから積極的に自分の思想や理論を築き上げてゆくディスカッションの場を

「シェア（共有）」していく文化であると次第に判っていったのだ。となると、私のように何も言わず自分だけで楽しんでるからいいというような存在は、ルール違反になるのだ。さまざまな人種や文化の異なる人々が集まって成立している社会、合衆国では、表現しなければ判らないのに表現しようとしなないことは「アン・フェア（不公平・不正義）」な振る舞いと受け取られかねないのだ。

言わなくても「あうん」の呼吸で判る国と、表現しなければ何も伝わらない国の差は大きなと感じ始めていった。

月は美し

世界各国からのゲストのために、市内観光をはじめとするさまざまな企画も研究所は用意してくれていた。美術館めぐりや市内観光は、これからこの街に二年近く住もうとするものには必要ない。後でゆっくり見ればいいのだし、第一それぞれのオブショナル・イベントが留学生には高価に思えた。五十ドルから六十ドル（約六千円から七千円）はする。日本にいれば大したことはないと使っている、これからの生活を考えれば節約をしなければならない。

それでもセミナー四日目の企画には参加した。「ワシントン・スピリット」と呼ばれる遊覧船に乗り、ポトマック川を流れながらディナーをとるという企画だった。研究所主催の夕食会なら出席しなければ教授たちに申し訳ないとい

う、いかにも日本人的な発想が堅い財布の口を開かせた。だが乗ってみて気づいたが、研究所の先生は誰も参加してはいなかった。

席は気の合った仲間が自由に座り、私は窓際の開いている一つの席に当たりをつけて座っても良いかを尋ねた。四人掛けのテーブルに私のほかは、カナダから来た五十代の開業医とそこで働いているという二十代の看護婦だった。私より遅れて来たのはミシガン州から来た四十代後半の派手な立ちの看護学校の先生だった。不思議なものでセミナーのディスカッションとは異なり、緊張のうちとけた和やかな会話が弾んだ。それぞれの国の食べ物、ポトマック川を見ながら風景の話題、しかし勿論、私の一語一句ももらさず聞かなければという英語への緊張は緩むはずはない。できればそろそろ会話を休みたい。

そんな時、中央のフロアーで数人の若者たちによるミュージカル・ショーが始まった。見れば彼らは、今しがたまで我々に給仕してくれていたウェイター、ウェイトレスたちではないか。

ミシガンから来た婦人が教えてくれた。「彼らは、将来、ブロードウェイの舞台に立つことを夢に見てこうして働きながら踊っているのです」人間はいつどこでどこで認められ、誰に引き上げられるかわからない。アメリカン・ドリームを抱きつつ踊り、歌い、活き活きと給仕の仕事をする彼らには、明るさが、希望が手に取れるほど身近に感じられる。そこには日本の勤労学生にイメージされる「苦勞しながら」といった重苦しい雰囲気は微塵もない。私は思わず心が高揚してきて、なるほどこの解放的な夢の表現こそアメリカの素晴らしい側面だと、「アメリカン・ドリーム」という言葉を口の中で呪文の

ように繰り返していた。

シヨ一の後はみんな思い思いのグラスを手に、席を移動したり船の中を散策したりし始める。私も室内からデッキに出てみた。乗船したときはまだ明るかったのに、もうすっかり闇の中だ。

日中の陽射しが眩しく、暑い六月の初めだが、ポトマック川の夜風は少し寒いくらいに肌に触れる。我々の団体以外にも、タキシードにドレスという組み合わせの恋人たちも肩を寄せ合い初夏のひとつきをたたずんでいる。

見上げると月だ。日本で見たのと同じ月だ。

そんな当たり前のことが私にはたまらなく嬉しかった。二日月よりはややふくらんだほのかな、そして穏やかな光が真っ暗な空に浮かんでいる。たしかに私は照らされている。瞬時、私は法然上人のお歌「月影のいたらぬ里はなけれど

もながむる人の心にぞすむ」を思った。

デッキにいる人たちに

「月が見えますか？」

「美しいでしょう？」

と尋ねて歩いた。

「きれいだ」「美しいよ」という答えが返ってきた。デッキにくつろぐ十数人の間で話題はあつというまに「月」への賞賛の会話となった。月は誰にも美しいと感じてもらえるんだ。私の喜びは広がった。ひととき美しいワンプリース姿のあのイタリアの女医を見つけた。今度はこちらから声をかけた。「ハイ、月を見てますか？」「きれいなね」と返す彼女につかえながら法然上人のお歌の説明を試みた。彼女は「ワンダフル・ストーリー（素晴らしい話だわ）」と言って手を差し出してきた。私たちは掌の力を感じる握手を交わした。

（つづく）

今から十一年も前のこと、当時ビルマ、今ではミャンマーと呼ぶ国に行ったことがあります。

御存じのお方も多いでしょう、この国は大変な仏教国で、首都のラングーン、今ランゴンにあるシエエタゴンパゴダは特に有名です。

その当時でも、この国はどんな田舎街に行っても、お寺（パゴダ）だけは立派にそびえていて、何かここまで自分の生活をなげうってまで、お布施をする人々に、その日常生活ぶりから余りに貧しく、不健康な中で、それは、僧侶である私にして、考えさせられたものでした。

さて、その国で出会った多くの仏様は、みんな寝ていました。

これはすっかり涅槃像であるとばかり思っていたのですが、通訳の人は、これは涅槃像ではない、横たわる仏であるというのです。確かにお顔を拝見してビックリしました。なんとその仏様の目は、パッチリ開いているではありませんか。そしてよくその姿を観察すると、両足が足首のところまで軽く交差しているのです。涅槃像と横たわる仏との違いはここなんだなと思いました。

通訳の人は、「ビルマは暑い国です。だからお説法をする時も、瞑想をする時も、冷たい地面に体の多くをつけて、楽な形でするほうがいいのです」と言うのです。これはなかなかうなずける話です。私も学生時代、ゼミ

で經典の名は忘れましたが、「難しい話をする時は、体を楽にしないさい」という言葉で始まるお経を読んだ覚えがあります。この教えを、まさにビルマの仏様は実行しているのです。何かとても楽しい気分、そして教えを身近なものに感じさせてくれる、そんなお姿だと思いました。そういえば、ビルマでは『ありがとう』というお礼の言葉は、直訳すると、『あなた功德が積めてよかったね』と言うのです。御礼を言う側の方がです。これには脱帽ですよ。

当時のビルマは、仏様の教えが、袴を着ることなく、そして正々堂々と大道を歩いている、そんな印象を持った国でした。

(H)

待望の読者のコーナー開設

『浄土』では、以前からご要望の声が多かった読者のコーナーを開設することになりました。私にとつての法然上人。といった内容で筆をふるって頂き（タイトルは自由）左記の要領でどんどんご応募下さい。採用分に関しては記念品を進呈します。

★投稿募集★

- ①随筆・詩など：四百字詰め原稿用紙十枚以内。
 - ②俳句・川柳は二句、短歌は二首まで。
 - ③その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりとお気軽にお聞かせ下さい。
- …適宜

投稿は随時受け付けております。ただし採否に關しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却致しませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。秀作をお待ちしています！

△事務局だより▽

◎バックナンバーを搜しています！

前回に引き続き、今月もバックナンバーを搜しています。皆様方のお手元に左記の号がございましたら、お手数ですが事務局まで二報頂ければ幸いです。何卒ご協力をお願い致します。

◎昭和三十八年二～四月号、六、七、九～十二月号／三十九年一～十一月号／四十年二、四～十二月号／四十一年三月号／四十三年七月号／四十五年四月号／四十六年十一月号／四十九年四月号／五十一年二月号／平成三年一月号

連絡先

法然上人鑽仰会

〒105

東京都港区芝公園四一七―四

明照会館内

TEL 〇三―三五七八―六九四七

FAX 〇三―三五七八―七〇三六



●「冬極まりし春近し」の言葉そのままでの季節を迎えていることでしょう。旧の正月や節分を過ぎてからのほうが、寒の戻りといいますが、寒さが一層のこと厳しく感じられるこの頃です。

●二月十五日は、日本では釈尊「涅槃会」といわれています。全国の各本山等で、涅槃図を飾り、釈尊の涅槃を追悼し法要が行われることでしょう。昔は涅槃だんごなどを作り、参詣者に撒いたという話も聞かれますが、今では地方の寺の一部で行われているに限られるようです。そこでインド旅行記を出版されている北山宏明氏に、釈尊お涅槃の物語を回想していただいた。また、本会理事でもあります大室了皓氏に、増上寺の涅槃図についてご執筆頂きました。釈尊のお涅槃を偲んで頂ければと思います。

●佐藤氏の「アメリカ留学記」は二回目の執筆です。佐藤氏は生命倫理の研究で二年間留学されました。本誌には専門的、学問的なことではなく、佐藤氏がまず強く感じ取られたことなどをお書き頂きました。来月号にて完結致します。乞うご期待。

●皆様から大変好評をいただいた連載「現代の快僧」も今月号で一応閉ざさせて頂きます。さまざまな現代を生きてる僧侶を取材頂いた稲葉氏には、今後何かの形でご協力を仰ぎたいと考えています。

●今年は国際的に、国連が定めた「国連寛容年」だそうです。昨年の「家族年」、一昨年の「先住民年」だったことを考えますと、今年の「寛容年」というのは、何かいつもと少し趣が違うように思われます。

国連の公式文書でどのように定義しているのかわかりませんが、「寛容」という言葉から連想する日本の宗教家は、何と言っても「法然上人」でしょう。その伝えられる柔和なお顔立ちのみならず、あの「建永の法難」に遭い、土佐流刑が決まった時でさえ、地方に行く縁を与えられたことを「朝恩」とまでおっしゃっている寛容さは、驚きの数々や、情眼についてさえ許してくれる宗教家は他にいないでしょう。そうしたことから考えれば、「寛容年」である今年は、まさに「法然上人」の年と言ってもさしつかえないと思います。本誌「浄土」をご講読の皆様、今年にもっと声を大にして「法然上人」について語ってゆきたいと思っています。(長)

(編集チーフ)
編集スタッフ

長谷川信潤
齋藤晃道
栗田順一
村田洋一
太田正孝
石上俊教

●お願い

町名変更や移転などで住所や電話番号が変わる際には、お手数ですが事務局までお知らせ下さい。本誌がお届けできなくなるなど、支障を来すことがございます。

また、当会では随時新会員を募集しています。檀信徒、お知り合いの方々に是非ともご入会をお勧め下さい。よろしくお願い致します。

浄土

六十一巻 二月号

年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成七年一月二十五日
発行 平成七年二月一日

編集人 宮林昭彦
発行人 牧田諦亮
印刷所 日経印刷株式会社

〒一〇五 東京都港区芝公園四七四明照会館内
発行所 法然上人鑑仰会
電話 〇三三五六八六九四七
FAX 〇三三五六八四〇三六



SAPPORO

私たちは味わいライフを追求します。

うまい、うまいで、カロリー半分。 自信作〈カロリー-half〉



サッポロ生ビール カロリー-half

飲酒は20歳をすぎから

●ご協力をお願い：自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社

LIFE TOGETHER



人間のやさしさをクルマに。

スピードおさえて、いい運転。シートベルトをしめましょう。

姿と、かたち。



これが、新しいセドリック

高級車を最大の事業は、その姿とカタチである。
つくひの強い意志が現れる姿と、それを企業に具現化した正統のフォルム。すなわち、カタチである。
まず、姿がいい。カタチがいい。新しいセドリックを見てほしい。

Cedric

日産のかたちを見てください。PHOTO: セドリックV30 ツインカムターボ プロアム
VIP ● 全長4800×全幅1745×全高1410(%)主
な装備 ● VG30DET(V6 ツインカムターボ・総排気量2960cc)エンジン ● 最高出力255PS/6000rpm(※NET値) ● 最大トルク35.0kgm/
3200rpm ● フルレンジ電子制御4速オートマチック(E-AT)(※NET値)とは、エンジンを車両に搭載した状態とほぼ同等条件で測定したも
のです。日産自動車株式会社お客様相談室 ● 全国共通フリーダイヤル0120-315-232 お近くのローレル販売会社へ。